

— 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

未来を思い浮かべるとき、あなたのまぶたの裏にはどのような風景が映るだろうか。それは輝かしい未来なのかもしれない。あるいは陰鬱な未来なのかもしれない。すべてが一変しているかもしれないし、これまでと何も変わっていないのかもしれない。もしかしたら世の終わりを見出した人もいるかもしれない。

あなたが思い描いた風景がどのようなものだったかについて、もう少し尋ねさせてもらいたい。その風景は、都市のものであったらどうか。あるいは、都市とは違う別の場所の風景をイメージしただろうか。それとも、具体的な場所とは関係しないような、何かほかの次元の風景をイメージしただろうか。

一般的にいつて、人が未来を想像するとき、それを都市という空間に見出そうとすることが、これまでのひとつの定番となっていた。たとえば、手塚治虫が1949年に発表した漫画『メトロポリス』が描いた未来は、上海テレビ塔（東方明珠塔）をも思わせるデザインの高層ビルが林立し、そのあいだの空中を乗り物が飛びかい、たくさんのロボットが活躍するような大都市であった。このような未来都市のイメージは、SF小説や映画などのさまざまな媒体をとおして、数えきれないほど多く流布されてきた。

「」。人が都市に目を向けるとき、そこにさまざまな意味での未来を見出そうとすることも、これまでごくふつうに行われてきた。レイモンド・ウィリアムズが指摘するように、人びとは田舎に過去を、都市に未来を見てきたのである。

イメージだけでなく実際にも、都市は未来に近い場所であり続けてきた。20世紀は激しい都市化の時代であった。都市は変貌することを常態としており、そこではつねに新しいものが生み出されていた。「20世紀から今日まで、都市という場所はその中に『未来』が先取りのに現れるような場所として存在してきた」（若林幹夫）のである。人びとも、自分の生活や人生に新しい何かを求めようとするとき、しばしば都市へと向かった。

都市という空間と、未来という時間は、ともに分かちがたく結びついていてきた。未来へと続く時間の流れそのものは、本来的に

は見ることにも触れることもできない。しかしそれを可視化し、あるいは手触りのある何かへと変換させる装置として、都市の空間は大きな役割を果たしてきたのである。

とはいえ今日では、都市と未来をイコールで結びつけるような考え方は、もはや自明のものではなくなっている。都市と未来の関係性はさまざまに切り崩されている。とくに近代において都市に「成長」をもたらした都市化の奔流はすでに落ち着いている。また、20世紀末から急速に世界中を覆うようになったサイバースペースの影響は大きいだろう。サイバースペースはさまざまな先鋭的な事象の舞台となり、空間と時間の関係を揺るがしていった。電子メディアは場所感覚の喪失 (no sense of place) を引き起こすと論じたのはジョシュア・メイロウィツであるが、インターネットが生活のあらゆる局面にまで深く浸透した今日では、座標や距離の概念からも解き放たれる空間感覚の喪失 (no sense of space) を生じているようにも思われる。

もちろん都市が消えてなくなることは考えられない。政治経済をはじめとする諸領域での中枢管理機能が大都市に集積する状況は、グローバル化の進展とともにますます強まっているともいえる。しかしそうであっても、人が集まり共存する場としての都市のあり方、都市という社会のあり方は、その根幹から問いなおされざるをえなくなっている。未来のエンジェントであることをアイデンティティのひとつとしていた都市は、次第にその地位を手放しつつある。その先にはいったいどのような未来が待っているのだろうか。

未来とは、いまだ来らぬ存在である。いま、私たちがなんらかの未来をイメージしているとしても、それは現在になされている行為である以上、未来そのものとはいえない。イメージとしての未来が、個々人の想像を超えて社会的に存在するためには、より具体的な実体をもつ別の何かとの結びつきをもち、それをおして「いま・ここ」に現れ出ることが重要になる。

^B これまでの都市ではどのように未来なるものが存在してきたか。イメージとしての未来にどのようなかたちが与えられてきたか。

まず挙げられるのは建築や都市計画である。建築行為とその成果としての建造環境は、都市の未来像を物理的に表現するのに重要な役割を果たしてきた。建築家は新奇で壮麗なデザインを競い、未来社会の設計者として、世の人びとにビジョンを語りか

けてきた。たとえば、機能主義を追求した白く輝く建築で知られるル・コルビュジエは、20世紀モダニズムの先端に堅固なかたちを与える設計者として世界に君臨し、いくつもの都市建設プロジェクトに影響を与えてきた。高度経済成長期日本においては、新陳代謝を意味するメタボリズムを標榜する建築家・都市計画家たちのムーブメントが巻き起こり、地形の改変をも厭わ^{いと}ないようなメガストラクチャーによるまったく新しい都市が構想された。

物理的な側面に限られない広い意味での都市の建設が、国家や宗教などの名のもとに力強く推し進められるときにも、人びとはそこに未来の理想社会の輪郭を見出すことになった。その典型となるのは、社会主義・共産主義国家における都市の改造や建設である。旧社会の残滓^{ざんし}を破壊し、新社会の原理である社会主義・共産主義の合理性や先進性、そして偉大さを表現する建築・モニュメントが、確固たる世界観のもとで計画的に配置されていく。都市は社会主義・共産主義が約束する理想的な未来を実現させていくためのショーケースとなったのである。

博覧会のようなイベントもその例として挙げることができる。たとえば1970年に開催された大阪万博（日本万国博覧会）は、日本での高度経済成長を背景として、その空間的・時間的な延長線上に人類の未来を描こうとする意欲的なメガイベントとなった。6400万人にも達した数多くの来場者に対し、展示という装置をとおして、イメージすべき未来の具体像を積極的にさし示す力を遺憾なく発揮した。2025年にふたたび大阪で開催される万博（日本国際博覧会）は、フォーカスをより鋭く未来へと絞り込み、万博という「未来社会の実験場」において「いのち輝く未来社会のデザイン」を提示することをテーマとして掲げている。

未来のイメージに具体的なかたちが与えられる機会は、都市建設やメガイベントにかぎられることではない。激しい変動のただなかにある都市において日々未知なるものと遭遇することや、都市的生活様式が可能にした過去にはありえないような経験をしていくことは、人びとに未来なるものたしかな先触れを感じさせることであろう。

要するに、新しいものが生み出されること、つまり、創造のプロセスこそが、人びとに未来の実体を感じさせる社会的基礎となるのである。

古来から都市は創造の場であった。経済面に着目して都市を捉えるならば、まず何よりそれは集積経済の空間であり、とりわけ集積を生かした生産の増大に特徴づけられるが、都市はイノベーションの孵卵器 (incubator) として機能することも重要である。このことに早くから気づいていたのはジェイン・ジェイコブズである。彼女が論じるところでは、大小の多種多様な企業が活動できるという意味での都市の多様性こそが、イノベーションを生み出す原因であり、また、イノベーションの結果としてさらに進展していくものなのである。

ジェイコブズのアイデアでとくに重要なのは、都市経済の核心的要素のひとつであるイノベーションが、文化の次元とも深く関わる多様性という要因に規定されていると捉えた観点であろう。この観点は容易にさらに展開させていくことができる。ジェイコブズが説明したのは経済活動におけるイノベーションについてであるが、ほかのさまざまな領域での創造的な営為一般にも同じようなことが当てはまりそうである。

ジェイコブズの先駆的な議論からほどなくして、都市の多様性と文化の創造の関係を解きほぐす画期的な社会学理論が提唱される。クロード・S・フィッシャーの下位文化理論である。フィッシャーはシカゴ学派都市社会学、とくにルイス・ワースのアーバンイズム理論を継承するという問題設定から、都市環境がどのような社会的効果をもたらすのかについての理論的探究を試みている。ここでフィッシャーが主張したのは、人口の集中は、下位文化 (サブカルチャー) の多様性を増大し、下位文化を強化し、下位文化間の普及を促進させることで、都市生活に浸透している逸脱や発明などの非通念性 (unconventionality) を生み出している、というものであった。

フィッシャーの理論には、下位文化の増大、強化、普及という3つのポイントがある。①下位文化の増大が生じるのは、異質な大量人口が高密度に集まるために社会的な分業・分化が促されることによる。②下位文化が強化されるのは、マイナーな文化であっても、都市では一定の人数が集まりやすくその拠点を形成できるからであり、また、その結果として周囲に対照的・対抗的な別の文化集団が存在し、それらと互いに関わり合い際立たせ合う効果が生じるからである。そして、③下位文化の普及というのは、少数派の文化集団であっても、ほかの多くの人口と接触する機会があるため、その文化がほかに採用される可能性が高

まるということである。

簡単にいえば、接触可能な人口量が非常に多い都市の社会においては、マイナーな文化に関与する人であっても同好の士と出会う機会もそれだけ多くなるということである。また、そうして撒かれた下位文化の小さな種も、都市という土壌であれば、根を下ろして大きく育つていけるチャンスがある、ということである。

下位文化理論はもとは都市社会の理論として構築されたものだが、やはり文化の理論でもあった。ここでフィッシャーは、文化の創造を都市環境の効果によるものと位置づけ、それが展開していくプロセスを明らかにした。都市では多様な文化が百花繚乱する。そこで生まれる下位文化は玉石混交かもしれないが、こうした環境のなかで、玉となるよう磨かれていく機会を得られることの効果はきわめて大きい。つまり、文化の創造には都市という環境を必要とするのである。

都市・文化・創造の結びつきに着目した議論は、フィッシャー以降も、さまざまな分野で多様に展開されている。なかでもとくに多方面からの関心を集めたのは、チャールズ・ランドリーやリチャード・フロリダらによる創造都市 (creative city) の議論である。

ランドリーは未来に向けた新しい都市の発展を構想するなかで、その鍵となるのは芸術文化であると主張した。芸術にはあふれる創造性がある。それは人と社会の潜在的な力を刺激しうる。文化産業が発達する余地も生まれてくる。ひいては産業経済全般も含めた都市の活性化につながるのだという。芸術文化と産業経済を媒介するのは創造性である。激変のただなかにある現在から未来を構想しそれに向けて行動しようとするとき、必要なのは創造的な問題解決力だからである。こうした意味で、未来は創造都市にあるのである。

創造都市を論じるなかで、とりわけ人びとのもつ能力のあり方に注目したのはフロリダである。彼が主張するところでは、技術や芸術のイノベーションを生み出し、産業を発展させ、新しい文明を進化させるのは、人間の創造力である。そしてそれを引き出すのが都市という空間なのである。フロリダはこの考え方を3つのT理論と呼んでいる。都市環境の寛容さ (Tolerance) が、クリエイティブな才能 (Talent) をもつ人びと、つまりクリエイティブ階級を引き寄せ、その人びとが先進的な技術

(Technology) を駆使して活躍する。こうしたクリエイティブ階級の働きが経済の発展を先導していく。ここで鍵となるのは芸術・文化・多様性である。

創造都市論は現実の都市政策・都市開発を動かしている。文化の創造に都市の未来を賭けようとする政策である。世界中で芸術文化に力を注ぐ都市開発や地域づくりが行われている。このことは都市の文化をよりいっそう豊かなものとするのに一定の寄与をしているだろう。

^Dしかし、創造都市の先にある未来には、矛盾をはらんだ難問が見え隠れしている。創造都市をつくろうとする再開発は、ジェントリフィケーションそのものになりかねないのではないだろうか。

ジェントリフィケーションとは、都心の低未利用地区やいわゆる低所得者居住地区などに資本が流れ込み、そこが商品価値の高い空間へとつくり変えられていく一連の開発の流れのことをいう。

ジェントリフィケーション型の再開発事業のなかで、空間の価値を高めるための道具として芸術文化が使われるとき、そこで芸術文化の創造性や潜在力、そして多様性は生き延びることはできるだろうか。名ばかりの芸術文化のフレーバーで装われた、世界中の再開発地区のどこにも見られるような無個性な景観が産出されるかもしれない。多様性どころか、むしろフランセスク・ムニョスのいう「時空間のイコライザー」としても機能してしまうかもしれない。

これまでみてきたように、未来を構想し創造していかうとすることは、すぐれて都市に特徴的な営みであった。それは、「いま・ここ」には存在していないものを、眼前の空間に投影しようとすることであつた。都市とはこのような試みがなされていく場でもあつた。

都市は「いま・ここ」からはじまる時空間の広がりの中の結節点のようである。世界都市仮説やグローバル・シティ論が論じたように、また、統合機関理論や結節機関理論が論じたように、都市はほかの都市と空間の隔たりを超えて結び合っていく。このことと相似形をなすように、時間軸における広がりの中でも、都市は結節点となるのである。

若林幹夫は「都市は、『来るべき未来』を先取りに示す場所であるだけでなく、『かつて未来としてイメージされたもの』

が堆積してゆく場所でもある」と述べている。このように、都市空間の「現在」には、「過去の未来」がないまぜになっている。さらにいえば、構想され創造されるものは必ずしも未来であるとはかぎらない。「いま・ここ」には存在していないさまざまなものが、かたちを与えられることを待っている。それが過去であつてもなんら不都合はない。

空間と時間の関係性に焦点を当てた都市論を展開したケヴィン・リンチは、「過去と未来は、選ばれた出来事を用いてつくられた想像の創作物である。私たちは、それを拡大する方法を学ぶことができる」のだと述べている。

過去は未来のように新たにしてくれるものだろうか。もちろん時間はもとには戻せないが、あらためて過去を想起し再解釈を試みることもできるし、過去のイメージを利用して新しいことを進めていくこともできる。エリック・ホブズボームらが論じたように、伝統の創造をすることもできるのである。

創造都市の発想やジェントリフィケーション的な構造が、過去にフォーカスすることもある。歴史をテーマとした空間づくりや都市再開発の事例を世界中にみることができる。

(松尾浩一郎「創造と継承」)

注 イコライザー 均一化するもの。

設問

(一) 空欄「 」に入る語句として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 似て非なり
- 2 言わずもがなである
- 3 逆もまた真である
- 4 事実は小説よりも奇なり
- 5 火を見るよりも明らかである

(二) 傍線——A「未来のエイジェントであることをアイデンティティのひとつとしていた都市は、次第にその地位を手放しつつある」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 政治経済をはじめとする諸領域での中枢管理機能が都市に集積されるようになってきたため、グローバル化の進展は強まったが、人びとは都市と未来の関係性に限界を見出すようになった。

2 激しい都市化の時代では都市と未来はイコールで結びつけられていたが、人びとが空間感覚や場所感覚を喪失したことにより、都市はいずれ消えてなくなる存在だと捉えられるようになった。

3 都市のイメージはさまざまな媒体をとおして描かれ流布してきたが、今日ではインターネットが生活のあらゆる局面にまで浸透したため、具体的な場所とは関係しないほかの次元の風景が主に描かれるようになってきた。

4 都市はつねに変貌し新しいものが生み出される空間であったが、サイバースペースの影響により、今日では空間と時間の関係が揺るがされ、人が集まり共存する場としての都市のあり方の根幹が問いなおされるようになった。

5 人びとは自分の生活や人生に新しい何かを求めようとするとき都市へ向かう傾向にあったが、今日では座標や距離の概念から解き放たれたため、電子メディアで未来を先取りするようになり、都市化の奔流が落ち着くことになった。

(三) 傍線——Bについて、「これまでの都市」で「未来なるものが存在してきた」といえる例として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 新奇で壮麗なデザインを競った建築家が実現させた建造環境は、新社会の偉大さを表現する機能を果たした。

2 メタボリズムを標榜する建築家や都市計画家たちの手で、地形に適した建築による新しい都市が実現された。

3 博覧会は、経済成長の具体像をさし示す力を遺憾なく発揮するためのイベントとして、都市でデザインされた。

4 都市計画に影響を与えた機能主義の建築によって、国家や宗教の名のもと、社会の原理を表現する都市が建設された。

5 確固とした世界観のもとでなされた、社会主義・共産主義国家における都市の建設では、理想社会の輪郭が見られた。

(四) 傍線——Cについて、「文化の創造には都市という環境を必要とするのである」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 集積経済の空間となった都市において、イノベーションの結果として玉石混交のマイナーな文化が生産されることが社会

的な分業・分化を促して下位文化が普及するように、文化を創造する上では都市という空間が不可欠である。

2 接触可能な人口量が非常に多い都市においては、マイナーな文化に関与する人であっても同好の士と出会える機会が多くなり、都市という土壌で下位文化も育つチャンスがあるように、都市の多様性は文化の創造と関わっている。

3 イノベーションの孵卵器として都市が機能しマイナーな文化が強化されるとともに、非通念的な発明が都市生活に普及することで下位文化が進展するように、都市の多様性が創造的な文化を促進させている。

4 都市では異質な大量人口が高密度で集まるため、下位文化間での対抗が強化されて大小の文化集団が形成されるので、多種多様な企業が活動できるようになり、多様な文化が都市という空間で創造される。

5 集積を生かした生産の増大を特徴とする都市においては、多様な下位文化が増大するため、先駆的な下位文化理論を展開させることが可能となるので、都市の多様性と文化の創造の関係を解きほぐすことができるようになる。

(五) 傍線——Dについて、「創造都市の先にある未来には、矛盾をはらんだ難問が見え隠れしている」とはどういうことか。適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 都市・文化・創造の結びつきに着目し、人びとがもつ行動力と経済力を鍵とする創造都市論は、世界中の都市開発を先導しているが、低未利用地区の再開発事業においては、名ばかりの芸術空間となる可能性がある。

2 人と社会の潜在的な力を刺激し、新しい文明を進化させる創造性にあふれた地域づくりを求める創造都市論は、さまざまな分野からの関心を集め多様に展開されているが、未来においても価値あるものとして生き延びる保証はない。

3 人間の創造力によって芸術や産業を発達させることが都市の活性化につながる創造都市論は、都市における文化産業を発展させてきたが、社会が激変する中で、都市の未来を文化の創造に賭けることが難しくなっている。

4 芸術文化と産業経済を媒介する創造性を引き出す空間が都市だとする創造都市論は、豊かな文化の都市開発に寄与しているが、空間の価値を高める道具として芸術文化が再開発に使われた場合、無個性な景観が産出されるおそれがある。

5 人間の創造力と寛容さによって、クリエイティブ階級の先進的な技術が駆使できる都市環境へとつくり変えようという創

造都市論は、芸術文化に力を注ぐ地域づくりの構想に貢献しているが、現実では資本が尽きて未開発に終わる危険がある。

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

- 1 未来の風景を思い浮かべるとき、一般的に人は具体的な場所をイメージしがちだ。
- 2 高層ビルが林立しロボットが多数存在する映画の中の都市は、陰鬱なイメージのものが多く。
- 3 漫画『メトロポリス』で描かれる空間は、SF小説で描かれる未来都市の典型の一つであり、似たような例が散見される。
- 4 都市が生産の場であるという古来から存在する考え方に対して、筆者はジェイコブズの論を引き合いに出し、懐疑的な立場を示している。

- 5 フィッシャーの理論は、もとは都市社会の理論として、シカゴ学派都市社会学の理論を参照しつつ構築されたものである。
- 6 フロリダが主張する3つのT理論は、ジェイコブズの論を批判的に継承したもので、都市論として筆者は高く評価している。

(七) 傍線——について、「時間軸における広がりの中なかでも、都市は結節点となる」といえるのはなぜか、説明せよ(四十字以内、句読点を含む)。

(以上・九十点)

二 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

かの童子も化来の人なるゆゑに、年積もり鹿島の明神に百日参籠^あ申し、そのうち万事死相を見るべからざる由、誓願す。しかるに九十九日目に、童子あまた集まり小蛇を殺さんと引き回すを、安倍の童子見、「死相見るべからざる」の誓ひなるゆゑに、かの蛇を買ひ放つなり。

その徳のゆゑに、百日満ずる日、美女、宮内に来たり申すやう、「我こそ昨日の蛇なり。我はこれ、竜宮の弟女^{おとひめ}なり。そのゆゑに礼述をなし、竜宮へ請はる。早く至り給へ」といふ。安倍の童子、もつとも参詣申すなり。しかるに使ひのひめ、語りていはく、「竜宮において重宝の四寸の石の匣^{せき}あり。千金は給はるとも、かれは得ず。汝、乞ひ取るべし」と教訓す。ほどなく竜宮へ至る。宮中にて仰せ、「まことにわがひとり弟女を、昨日助け給ふこと、言語に足らず」。千金の礼をもつて述べ給ふに、これを請けず。「宮海において四寸の石の匣あるべし。かれを給へ」と望むゆゑに、^い竜宮、「不思議の望みなるかな、もつとも出だすべし」と、すなはち給ふ。

閻浮に帰らんと暇を乞ふをりふし、竜宮にて烏薬を耳に付け給ふ。ほどなくもとの鹿島に帰り、諸鳥のさへづりを聞くに、よく聞き知るなり。しかるに何ごころなく拜殿に居す。東西より鳥二つ来たり、宮上にて一の鳥さへづるやうは、「汝は何方の鳥ぞ」と問ふ。また一つの鳥さへづりて、「我は都の鳥」と云々。都の鳥がいはいはく、「汝は何方の鳥ぞ」といふ。「我は関東の鳥」といふ。重ねてまた東方の鳥がいはいはく、「都には何事かあるや」といふ。西方の鳥がいはいはく、「都にはこの程は、王位のご悩、もつてのほかなり」といふ。東方の鳥がいはいはく、「そのゆゑ如何」と問ふ。西方の鳥がいはいはく、「去年、ご寝殿作り給ふ。その丑寅^うの柱の礎の下に、生きたる蛙と蛇とを築き籠むる。蛇は蛙を飲むべしとす。蛙は飲まれじと戦ふ。その炎上がつて、天皇、ご悩おはしますといふなり。かの礎を穿ち、蛙と蛇を取りたらんには、ご悩すなはち平癒あるべし」とさへづるを聞きて、すなはち都へ登り、「天下無双の博士」と札を出す。

あるとき、臣下大臣これを聞き、大きな車櫃^{くるまひつ}に蝮^{まむし}をあまた入れ、用意あつて、かの博士を召し出だし、「櫃の中を占ひ申

せ」との仰せなり。その内に、はや鳥、鹿島にてさへづるが如く、櫃の中の様子をさへづるを聞き、占ひぶりをして、「櫃の中には蝮あるべし」とつぶさに占ひ申し上ぐるなり。諸人、これを見聞き、不思議の由を申し、手を拍つことはかりなし。

すなはち、大臣公卿殿上人、集まり合ひありて、天皇のご悩を占はせ給ふなり。もとより博士は、鹿島にてより鳥のさへづりを聞き得たるゆゑに、右の様子つぶさに言上す。そのゆゑに寢殿の丑寅の礎の下を穿ち見給ふに、博士申す如く、蛙・蛇、これあるを取り捨つるに、ご悩も少し平癒の色あるゆゑ、いよいよ博士に「御祈禱つかまつれ」の由、綸言これあり。ゆゑに種々精誠をぬきんで、公卿大臣はさまざまの政をなし給ふによりて、ご平癒、嚴重なり。

そのときの博士を御殿に召され、をりふし清明の頃なるゆゑに、かの博士を「清明」と綸言あるによりて、すなはち博士の名を「清明」と号するなり。「清明」とは三月の節名なり。その時、「かれ程の博士、余にこれなし」と綸言ありて、「博士」の詞を給ふ。

(『簞篋抄』)

注 かの童子 安倍の童子。

化来 超自然的なはからいによつて出現すること。

閻浮 人間世界。

設問

(一) 傍線—— a・b の意味として適当なものを、次のうちからそれぞれ一つ選び、その番号を記せ。

a 参籠申し					b 丑寅				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
様々な寺社を巡礼し	決まった時刻に寺社に赴き申し	寺社にこもって祈願致し	かごに乗って寺社に参詣し	大勢で寺社に参拝し	北西	北東	南西	南東	東西

(二) 傍線—— ア「そのゆゑに礼述をなし、竜宮へ請はる」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

- 1 鹿島明神の化身である美女は、安倍の童子が命を助けてくれたことに感謝するとともに、竜宮からの招待の意向を安倍の童子が遣わした使者に伝えた。
- 2 竜宮の弟女は、安倍の童子が死相を避ける誓願を立てたことへの竜宮からの感謝を述べるとともに、竜宮からの招待の意向を安倍の童子が遣わした使者に伝えた。
- 3 竜宮の弟女は、安倍の童子が自らの正体を秘密にしてくれたことに感謝するとともに、竜宮からの招待の意向を安倍の童子に伝えた。
- 4 鹿島明神の化身である美女は、安倍の童子が多くの童子を集めてくれたことへの感謝を述べるとともに、竜宮からの招待の意向を安倍の童子に伝えた。
- 5 竜宮の弟女は、安倍の童子が自らを救ったことへの竜宮からの感謝を述べるとともに、竜宮からの招待の意向を安倍の童子に伝えた。

(三) 傍線——「イ」竜宮、「不思議の望みなるかな、もつとも出だすべし」と、すなはち給ふ」の解釈として適当なものを、

次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 竜宮は「千金よりも石の匣がよいとは意外な望みであるな、なるほど、そうであれば出してやろう」と言つて、すぐさま安倍の童子にお与えになる

2 竜宮は「秘蔵の石の匣の中身を知つて所望するとは怪しい望みであるな、なるほど、そうであれば追放してやろう」と、その時、安倍の童子におつしやる

3 竜宮は「石の匣の中身が見たいとは思いがけない望みであるな、思う存分、中身を取り出せばよい」と言つて、すぐさま安倍の童子にお与えになる

4 竜宮は「誰も知らないはずの石の匣を所望するとは意外な望みであるな、とりわけそう申すのであれば出してやろう」と言つて、すぐさま安倍の童子に差し上げる

5 竜宮は「千金に目もくれず石の匣を欲しがるとは思いがけない望みであるな、とりわけそう申すのであれば出さなくてはならない」と、その時、安倍の童子に差し上げる

(四) 傍線——ウ「諸人、これを見聞き、不思議の由を申し、手を拍つことはかりなし」の説明として適当なものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 鳥が櫃の中身知らせる様子を見聞きした誰もが、櫃の中に隠したものを鳥が言い当てたことを不思議と言ひ、驚いて手を拍つどころではなかった。

2 安倍の童子が櫃の中身を占う様子を見聞きした誰もが、外からは見えないものを言い当てたことを不思議と言ひ、盛んに感嘆して手を拍つた。

3 安倍の童子が櫃の中身を占う様子を見聞きした誰もが、鳥の鳴き声を理解したことを不思議と言ひ、驚いて手を拍つどころではなかった。

4 鳥が櫃の中身を知らせる様子を見聞きした誰もが、安倍の童子が鳥と会話できたことを不思議と言い、盛んに感嘆して手を拍った。

5 安倍の童子が櫃の中身を占う様子を見聞きした誰もが、中身が詳しく説明されたことを不思議と言い、驚いて手を拍つどころではなかった。

(五) 傍線——「取りたらん」の「ん」と文法的意味・用法が同じものを、次のうちから一つ選び、その番号を記せ。

1 御幸をなし参らせんと思ふはいかに。

2 何事をか奏すべかんなる。さないはせそ。

3 都へのぼり候ひなば、西八条へぞ参り候はんずらん。

4 さのみながらへて、おのれにうき目を見せんも我身ながらつれなかるべし。

5 事にふれて奇怪のふるまひどもがありけんなれば、俊寛をば思ひもよらず。

(六) 本文の内容に合致するものを、次のうちから二つ選び、その番号を記せ。

1 安倍の童子は他の童子たちに頼まれて小蛇を受け取った。

2 人間世界に戻った安倍の童子は、竜宮で処方された烏薬を耳に塗ってみた。

3 鹿島明神の拝殿に、東西から二羽の鳥がやって来た。

4 敵対する都の鳥と東国の鳥は、互いにだまし合っていた。

5 宮中の寝殿では、蛇と蛙の戦いによって火災が起こった。

6 安倍の童子は帝から、時節の呼び名にちなむ「清明」の名を賜った。

(七) 傍線——について、「博士」に任じられた理由を説明せよ(三十字以内、句読点を含む)。

(以上・六十点)